

新編水滸畫傳

四編

七

875  
37



宋江，弱軍

21  
875  
37

新編水滸畫傳卷之三拾七

東武 高井蘭山翁 譯編

其下

鬼天王軍師あびに公孫勝が計畧と可ありとて又想道蔡太師  
が返簡と似せん此人の高名の能筆あまば其筆者有まきと猶又  
諸頭領ふ對し唯恨らるる蔡太師ふ似るる筆者あまきとやるる時吳  
用が云某此豈己に心中に思量し了ぬ今天下に専ら行ゆる處の筆跡  
へ唯冢の字跡の則蕪東坡黃魯直米元章蔡太師あまきと名け  
宋朝の四絶とやの某一人の舊友に能諸家の字跡と寫さる者あり世の  
人皆稱して聖手書生と云慣せん這人原濟州城の秀才よして姓の  
蕭名に讓と号と又能武藝に達して鎗棒と使ふ是と用ハ必定能

新編水滸畫傳卷之三拾七

蔡太師が筆跡と假すべし。あつて戴院長と頼んで彼が家へ至らせ則ち  
 彼と誑ひて云べきは泰安州の岳廟に新く石碑と建つるに此碑文と  
 書人者隣国ふこれあり願くは先生駕と枉てあまを書さるべ大い  
 ある幸ひあらんとして先五十兩の銀と送つてこれと邀へ來り其跡ふ  
 又人と馳て彼が眷屬と賺し邀へ山陳ふ引取べし然らば彼必む心と  
 傾けく山陣に足と留め終に我らが為に書簡と假しめ此回の用  
 のにあらす。大事と成しむるに有べし。晁蓋が云其蕭讓と賺し邀  
 へ得ば書簡と假すことい足べし。猶又圖書印記と假さる人のあまを  
 いへんせん呉用が云長兄これと憂へまふとあられ。圖書と假せん人同  
 く濟州にあり。則ち姓は金双名は太堅と号は原來圖書と假するとの  
 妙手あり。又よく鎗と刺棒と使ふ彼が如く圖書玉石と雕るの妙手  
 とうふよう。人皆彼と稱し玉臂匠とや。是又五十兩の銀を送  
 て山陣に迎ふべし。此兩個の人へ只這回の用と調ふるのにあらす  
 山陣に長く彼等と用ひべき處あり。晁蓋大い悦んで云いよ  
 いよ此兩人と得るにことあつて計立處に成就すべし。とて其日の酒  
 宴と設けく戴宗と款待。晩に至り粧束と調へ一二百兩の銀と  
 取て包袱ふ裹乃ち又四の甲馬と腰に拴つけ。山を下り水と渡り  
 路口に出竟に神行の術をわして飛がてく。に飽行繞二時計の内  
 に濟州府に至り。即ち聖手書生蕭讓が家に尋行く門外より呼  
 り云々る。蕭先生家ふ在や。此時内より一人の秀才出來り。戴宗此秀  
 才と見ると頭は烏帽と戴き身は青衫と着し。腰は繡緜と繫  
 ひ。足は綾鞋と穿。相貌極めく風雅あり。此秀才己に門外に出られ

戴宗先問て云、志々ず秀才ハ蕭先生あるや。秀才答て云、蕭讓と  
ハ則ち某がてと足下ハ又何もの所より。何寺の吏有て来りて。お  
戴宗云、某ハ泰安州岳廟より来りて者あり。今岳廟ハ一ツの石碑  
と新に建てるもども。此碑文と書人ハ隣国に覚へあり。願くハ先生  
駕と柱く。これと書まふものあり。大なる幸あり。且微薄を。先  
五十兩の銀と送り。やいとも。則これと与へられ。蕭讓云、某ハ只文成  
做り。字と寫まると善するの。と。石碑と刻ると能く。須く妙手  
の刻匠と求め。可あらんや。戴宗云、刻匠の。と。某別に五十兩の  
銀と送て。玉臂匠。金大堅と頼んと欲を。望らる。先生吉日と擇まひ  
て。金大堅と共に駕と移る。蕭讓銀と得て。大に。即戴宗  
と。同く家と出て。金大堅が宿所へ。尋ね来り。己ハ半途。至て。蕭讓

忽ち前面と指さして云、対面より来る人。乃ち是金大堅  
戴宗彼来る人を見。頭ハ黒紗の中と戴き。身ハ緑紗の衣。或  
着。人品ハ文雅あり。此時蕭讓金大堅と扯住て。戴宗見へ。免  
乃ち泰安州の岳廟に新ハ石碑と立らる。に依る。我が輩兩人と頼  
る。碑文と書せ。碑文と刻。各五十兩の銀と送。我と足下  
と。岳廟ハ邀へ。一々詳ハ語り。金大堅あま  
と聞。大に悦び。乃ち戴宗と請て。酒店に至り。處ハ戴宗頼て。五  
十兩の銀と出。金大堅に送。云。願くハ吉日と擇んで。早駕  
と移。蕭讓云、今明日ハ是吉日あり。然ま。今日ハ先此に在  
て。暫く酒と酌。明日速に発足す。金大堅が。己に。か。の。ど。く。ん  
大に可。と。約と定め。其日ハ此。三人酒と酌。遂に盃と收めて。酒

竹編火奇畫傳卷之廿四



蕭讓金大堅途中  
遭賊軍



蕭讓金大堅途中遭賊軍

店と出し、金大堅へ先旅粧いと調ふべしとて宿所へ送り、蕭讓  
へ其夜戴宗と留め、己が家に歇ましめ翌日未明に起て戴宗と共  
暫く金大堅が來ると待居る處に金大堅も至り、三人同じく  
蕭讓が家と出、濟州城と離れ、十里許馳し、戴宗彼兩人に  
對して云々、兩位の先生の跡より静ふ來り、某の先に馳回て諸の  
人ふ斯と告宜し、途中まで出、兩人の先生と相迎とせしむんと  
て、遂に飛ぶごとく、跑行る。彼兩人の者、自ら包袱褌と背に擔、漸々末  
の上刺ふ至て、約莫七八十里許過しと思ふ處、前面呼る聲有て、五十  
人の小賊をせ出、當先一人の大將馬と進り、大音あげ、汝兩人何国よ  
り何国へ過るや。我今汝兩人と捉へ、其所と引出、宜し、是と看  
て、三盃と酌人と思ふとて、己小賊等に下知して、彼兩人と早く活捕

と呼、ちりちり、此大將、梁山泊の頭領、王英、蕭讓、是と聞、忙しく告  
て云々、某等、兩人、泰安州の岳廟、趣て碑文と書、碑文と彫の貧  
窮者共、曾て一錠の銀、すり携、只兩三套の舊衣あるのみ、  
王英益怒て、我何ぞ必しも汝等が貧福と論ぜんや、蕭讓、金大堅  
大に怒り、兩人同じく腰刀と拔て、王英、斬て、鬼、王英、鎗と捨て、相  
迎へ、戰、已に八九合に及ん、王英、急に馬と回、逃ると、兩人、跡を慕  
り、追行し、忽ち山の上、金鼓の聲、大に響き、左の方に雲裡、金剛  
束萬、すみ出、右の方、天杜、遷進、出、背後、白面、即、君、鄭、天  
壽、進、出、各、三十餘人、と引、前後、左右、と遮り、遂に蕭讓、金大堅、兩  
人と捉へ、横に抱り、豎に搜、直に林の内、入、四人の頭領、齊しく、兩人  
の者に對して云々、汝兩人、宜しく、心と安、ぐ、我輩、是、晁、天

王の命令と受則ち汝兩人と捉へく山陣に留人と欲ふのくも頭汝  
 等と害するにありは蕭讓等兩人が云我が輩に唯よく飯と普と  
 のくよとて雞と縛るの力もあく山陣に留めらひて何の用ある中らん  
 杜遷が云我が山陣の軍師吳学究原來足下兩人とる舊友といひ  
 殊更足下等ハ武藝の達人くふより向に戴宗と足下等の家ハ  
 遣して邀りしめく岳廟と云く都て詐ある宜く是と曉く  
 久々蕭讓金大堅とを問て大いあされ只面と見合はるあり  
 此時四人の頭領兩人の者と引て朱貴が店に至り頓て酒宴と設け  
 て兩人と款待其夜遂に導て山陣に至り處に晁蓋則ち諸の  
 頭領と俱ふ兩人の者と迎て相見へ豊に酒宴と具へく饗應く晁  
 蓋頓て蔡大師が返簡と假せんと圖るとと語り山陣に止められ

へ兩人齊く吳学究に對し某等兩人山陣に安身せば是ハ大いあり  
 然れども各都て妻子ありいんぞ能あまことを棄るん忍びんや吳用  
 が云足下らあまを憂へまふとあられ貴族と明日ハ山陣に邀へ來る  
 とて其夜ハ各退散くくるが翌日小賊來て蕭讓と金大堅が眷屬も  
 ととや邀へ來るまふ吳用の告く吳用頓て彼兩人と請て眷族らに  
 遇しわくる處に衆皆大に悦びいよく心と傾け膽と吐く山陣に止り  
 たり吳用又兩人と請て蔡大師が返簡并に圖書と假て宋公明を救  
 へんとと商議くくるに兩人齊く領兼して遂に返簡も圖書も全  
 く調くく則ち返簡と戴宗に与へ再び江州へ遣くくる晁蓋諸  
 頭領と共酒と飲居くる處に吳用俄に面色土の如く成て阿と一声叫  
 びく諸頭領大に駭て其故と問吳用答て云這回返簡と假くく



偏へに宋江と救えんが為あるの。豈料んや却て宋江と戴宗とと殺て成  
做出せし諸頭領もまこと聞て駭き恠んぞ。書中に何等の誤在て斯  
云ふや。呉用が云我先に事の忙りしに紛き大ひある差ひとあせり。蕭  
讓が云某が書ぬる筆跡蔡太師が字跡と同じ。あつてびつぎの所は差  
ありや。金大堅も又問て云某が雕くる圖書毛頭も誤くや。何と以て  
大ひある差ありや。呉用が云足下ら兩人のあせり處に少くも差ふ  
所ありれども我自ら誤てあせり所ありて然り。一人と助け救えんとて  
却て二人と殺と者唯我のことして再三悔で嘆息せり。此誤ゆる  
何と云や次と讀て明うかへん

○梁山泊の好漢法場と劫に

此時晁蓋等呉用に問て云返簡と假て何等の差ひありしや。呉用

答て此は假し圖書の文字は翰林蔡京と云四字あり。乃此圖書  
宋江戴宗二人と殺とあり。金大堅が云我毎度蔡太師が書簡并  
の文章と見くる。圖書毎々翰林蔡京の四字あり。是何の差ふ  
所ありし人。呉用が云足下等是とあせりや。今江州の蔡九知府は  
蔡京が子あり。父より子に遺り書翰の上はつらんど諱の字あり  
圖書と用人や。然る我誤て諱の字ある圖書と用ひぬ。ま戴宗  
必ぞ知府に疑き事竟に露るべし。晁蓋是と聞て大に驚き急し  
人と馳て戴宗と呼回さんと思へども。戴宗の本神行の法をなす  
飛がごとくに跑るものや。五百里以上と行つる翅を生じ先と翔ら  
ずば呼回すと能ふまじとて。各呆きころり斗りあり。呉用が云めと我  
此計は做まじく思ひされども。今いつふせん止とと得ざるふ依る

行人其計へかくのどく如斯と低言しつゝ晁蓋大に悦び頓て諸頭領の  
 号々を下し各粧束と調へ當日山と下り水と渉り急に江州と望  
 て進発す。叔戴宗へ己の江刃ふ至り直に知府が廳前ふ出て返簡成  
 呈しつゝ知府是と披見して書面を曉し則ち二十兩の銀を以て戴  
 宗と賞しつゝ戴宗廳前と退出し。牢中に至り先宋江と見て互に  
 悦ぶと限りぬ。叔蔡九知府へ急に宋江と都へ送るべしと商議して  
 囚車等と調へる處に彼黃文炳伺候せりと告ぐれば知府自ら是を  
 迎て後堂に至り。知府先黃文炳に對して云足下の吉吏近々に至るべし  
 預しめあること悦び黄文炳が云相公へ何と以て。吉吏の至ることを知るひ  
 めるや。知府が云昨日彼戴宗東京より回り則ち父大師が返簡と携へ  
 て來りくるが彼罪人宋江と近日京に送るべきとのことあり足下が吏も

頓て帝に奏聞して。官職と授けんづつと委細ふり來り。黄文炳  
 が云若果して此のどく人へ某莫太の福ひあり。然まども只恐らくは  
 尊父大師何ぞ輕々しく某らごとと早速奏聞あるんや。知府が云  
 足下尚あると疑は父が返簡と見て我が謬りあること知りる人と  
 て即ち彼返簡と取出し。そのこと見せしめられ黄文炳返簡と接へ  
 て始終りと見畢り。又圖書とそろつと良久しつゝ忽ち頭を揺て  
 云々つへ此返簡恐らくは假せあるん。知府が云何と以て。足下も此假  
 假せと云や。黄文炳が云尊父大師常に書簡と寄せり。時此圖書を用  
 ひるふや。知府が云常に寄る書簡の圖書はあまの此假ひつゝある  
 ゆへ也。此圖書を用ひるひぬ。黄文炳が云某不才とつゝとつゝ此書簡と  
 見し。弥假するもの疑ひあり。其故いつんとあまの翰林蔡京や云

新編水滸畫傳卷之廿七

文字ある図書へ尊父昔日翰林院学士なり。時こそ是と用ひるひされ。今直ふ太師丞相の墜りもひても同く昔日の図書と用ひる人や珠更親の方より子に送る書簡の上は、いづくんぞ諱の字ある図書と用んや。尊太師へ原來天下の書と觀盡し、多ひて博識大才の学者あるに、いづくんぞ敢てかくのぞらぬ差ひとあり。多へんや相公の。某が言と信い、多へんば彼戴宗と呼で委し、問多ひて東京の動静と語り、り、閑多へ若彼が詞、相違のこあ、此書則ち真の返簡ふあり。知府が云、彼戴宗へ未と東京に上らざる者あり、只一とび問り、夏の虚實分明に知しんと、乃ち黄文炳と屏風の背後に藏し置頓て一人の下官と戴宗が家に馳に、入り、叔戴宗へ梁山泊、この遠回返簡と假する。こと、一々詳に宗江、低言し、宋江の心中に是と悦ぶと限あり。此日の

戴宗一人の友と酒と酌で居る處に、俄ふ下官來り、知府相公院長を召す。ふと告ぐ、遂に戴宗と誘引して廳前に至り、いづくんぞ知府則ち問て云、汝前日東京に至り、一時はいつまの門より城中に入ぬや。戴宗答て云、某前日東京に至り、一時は夜中にあり、何れの門と云名を知り、ぞり、入り、知府が云、我が父太師が家あり、誰人出て汝を迎へぬや。戴宗が云、某太師の家に至りぬる時、一人の把門出、某を迎へ、則ち筆と書簡と取り、内へ入、又少頃して出來り、遂に某と客店へ導て、歇し、ぬ、翌日未明に、某又太師府の門前に至り、伺ひ、いづくんぞ彼把門、則ち返簡と持來て、某に付与ぬ。某日限と誤らんと、怕き、其日、其ま、東京と發足せり。知府又問て云、汝が對面し、把門へ年の比、幾何歳と思われ、其相貌、摸樣、いづくんぞ。戴宗が云、某府裡に至り、一時は己に夜中、いづくんぞ、翌日發足し、ぬ、時へ

五更の左側ゆゑ天色猶暗うりし由急彼把門と分明に見届ざりし  
 とも大概是と見らん中等の身材なりし少く鬚ありぬ知府よきと聞  
 大ひふ怒り罵て云汝何ぞ乱りの言と云や其上到着発足夜中又ハ五更  
 と偏に暗ふ託け且我父太師府の把門ハ王公と云ものありしりども  
 前年病死しぬるゆゑ又其忤と以て門と守らしむ此者いまだ二十に  
 過ぎるふいりんとぞとく鬚ありんや殊に門と守る者堂内に進  
 入と能び凡書簡等の取次ハ格別に又其役あつてもと兼ふ這回  
 の書簡ハ大事と云遣しるね別して諸役人よきと聞汝と廳前に  
 呼入を詳に其故とも問べきとあり然らん汝詐と以て我と誑人とする  
 やと遂に左右の軍卒に命じて戴宗と縛らせられハ戴宗大に驚き  
 何れに何の罪ありや某今答る處唯有し儘あり聊偽りとや  
 殊に某急に発足せしゆゑや曾て一個の役人も出いぬ何ぞ相公  
 と欺くといはん知府益怒る云汝奸賊打どんばつらんぞ  
 せんやと己に左右と顧み彼賊と痛く策りくと呼りしる諸の  
 軍卒とも心中に戴宗と憐れられども止事と得ぞ戴宗と拖り  
 倒し頓て棒と奉て散々に打し處に皮開け肉綻び血の滾々と流て  
 全身都て紅に染み入り戴宗今ハ堪がらぬ則ち白状して云らんハ  
 某向に梁山泊の下と過し處に一夥の強賊出り某と生捕彼書簡并  
 以禮物等盡く奪取て某が一命をうると饒ぬきども某再び飯郷  
 て相公に見へうとささと察し則ち山陣ふ於て再三死と乞うとも  
 彼敢て殺さずして却て此返簡と假し某に手へしゆゑ某先當座の罪  
 と脱んと欲し即ち是と携へ來て相公と誑き奉りぬ知府云汝分明

梁山泊の強盜等と通同して我が京へ送る禮物と棄ひ取らんとす  
まことの白状のまこと罪と支吾人とすりや再び汝と打とすんぞ有べ  
びとて又軍卒らの命に數十棒打められども白状の言始終同し  
しと知府又牢子らふ仰せ先戴宗と牢中へ遣し置く。知府は黄文炳  
と謝して云足下の高見にあらずんばすでに彼が為に証せしむ。大事と誤  
つべきに幸ひ足下の教に因りてあまを曉せしめて悦ぶこと極りあり。黄文  
炳が云某かの戴宗が動靜とるるに梁山泊の強盜等と通同して謀叛と  
企と図るに疑ひたり。若それと急に殺し置んば必ず後來の患は  
人知府宋江の反賊とるるに同罪に決断して先當地に於てあれと殺し  
其後表と京に献りて天子に奏聞せば可あらんや。黄文炳が云相公の高  
論極て明りあり。かくのどく急に斬罪と行ひ置る。梁山泊の盜賊ら

の牢と却とるることあり。然らば帝も必ず其功と勲閑有てよ。ま  
と恩賞し置んべし。知府あまを閉て大に悦び一向黄文炳が智見と  
称し置れば黄文炳も共悦んで遂に無為軍へぞ歸り置る。翌日蔡九  
知府黄孔目に仰せ明日宋江と戴宗とを街の上に出せ。あれと斬  
罪すべき間其用意と調ふべしと。嚴に命じ置る。黄孔目はめれ戴宗  
との交り厚き知己とるふよ。心中に甚どあまを悲しむ。乃ち知府  
に告て云らるる。明日は國家の忌日。明後日ハ又七月十五日中元の節か  
まへ此兩日の内斬罪を延し置んと。諫に。知府其議に同じ。此時  
梁山泊の豪傑等ハ兵用が謀を受則衆皆々山と下り。江州へ馳れ  
ども此日ハ猶道中に在て江州へ至らざり。處に今黄孔目知府に告  
て斬罪の日を延し置る。天宋江等兩人を救ひ置る。時會斗せり。蔡



黒旋風等大  
騷法場圖

九知府の黄孔目が言と容ひ斬罪の日と七月十七日に定め即ち街の上  
に斬場の土壇と設けしめ己み其日に至りしるば土兵軍卒五百餘人  
と催し知府親自黄孔目と同じく宋江戴宗兩人と監押して己に斬  
場へぞ引せり。貴賤雲霞のどくりに集つてあまをを見物し宋江戴宗  
兩人と深く憐む者多うり。宋江の前まへに引き戴宗の後うしろへ引き互  
に言もあらずして只顧頭と低くさうりあり五百餘人の土兵ども  
頓て兩人の者と引す先宋江と南面みなむかひに坐せしめ戴宗と北面きたむかひに坐し  
め緊く劍戟と建並べし。斬場の四方と諸軍卒に守らせ只午の上刻と  
待て首と刎べしとて劊子己に背後うしろに繞り明晃する刀日映し  
て扣へり。此時諸の見物人回と仰で牌の上うへに寫ししる文字とさる  
に其文に云江州府の狂人一名の宋江と云者向に反詩と吟じて壁の上うへに

書江州府の強盜等と通同して謀反と企んと図りぬるも今今日  
あまを斬罪に行ふ。又犯人一名の戴宗と云者宋江が為に私江州  
山泊に消息と通じて謀反と助んとせしめ同く斬罪を行ふ者  
と明く書着る。斯る所ふ斬場の東の隅より一夥の漢子ども諸  
人と推開て揜入しる。諸人は是とさるふ乃ち蛇と使つて薬と賣るもの  
どもあり。又西の隅より同く一夥の漢子共諸人と推分揜入しる。諸  
人あまをさるに乃ち棒と使つて薬と賣者ども土兵軍卒此射と見  
て大に罵つて云うる。汝等薬賣の漢子共云汝土兵等何ぞかくのどくを  
騒動することある。彼薬賣の漢子共云汝土兵等何ぞかくのどくを  
と云や縦ひ京に於て天子の人と殺しあふも又肯て人と放ち入と是  
と看せしめるふ。汝此小州あり只兩個の罪人と殺すのどくして見物と

制するべし我輩近く進入しよとて何の妨ありんぞ  
 一向争論しよる處に監斬官あまを閉じ土兵命じて呼り云る  
 其者共一人も近く進まじむるこあると未だ云も了らざるに又  
 南の隅より一夥の人擔を荷りて進み入る軍士らあまを遮つて  
 くる汝等擔を荷つて斬場近く進み來るいん速に外面に走り  
 出よ彼者どもが云我輩は皆知府相公の家を擔を運ぶ者共汝等  
 いんぞあまを攫人や土兵等が云汝ら果して知府相公の家に入  
 する者共あまを此處と過らば別の路と過るべし一向問答体ざりし  
 此の隅より又一夥の旅人車と推て挨へる土兵共罵つて云汝旅  
 客ら車と推て何の所に行んとするや旅客答て云我輩は皆道と  
 急ぐ者共此所を放ちて過らるる人土兵等が云汝若路と急ぐ者

あま別の道と求めて過るべしと再三再四あまを阻當しよるとも  
 彼旅客耳も聞入ざれば四方に制し罵り騒動切あして蔡九知府  
 もあまを禁ずると能はらざる己あてたる午の上刻に至り  
 軍卒ら先監斬官に告げ宋江戴宗兩人が首切と除き劊子  
 たる背後に轉りて刀と打つけんとせし處に一人の大漢子双の  
 手の斧と揮ひ恰も奔雷の如く吼て群人の内より跳り出急に二  
 人の劊子と砍倒し直に監斬官と望んぎ馬の前に砍てかりし  
 諸の土兵もあまを見急に劍戟と揮て走んとせしうも彼  
 大漢子の砍拂ちれ蔡九知府も這々命と遁ぎ逃去る斯る所東  
 の隅より出し蛇と使はる燕と賣漢子とも盡く刀と揮て斬場の  
 内を乱し入土兵等と散々に砍まらる又西の隅に扣る棒と使はる



漢と賣漢子ども同じく刀と拔持一齊に咄と喊き叫んで斬廻る南の  
 隅より擔を荷して入来りし漢子共各區担と輪して軍卒等と前  
 後左右に打伏せし。又北の隅より車と推て来りし旅客ども車と以  
 て土兵らに逃んとするを遮り其内二人の漢子一同に進み入一人は宋  
 江と背ひ又一人は戴宗と擔け其餘の旅客は各弓箭と取出し軍  
 卒等と射殺し四方同時に劍戟起りて土兵共と傷ふと許多なる  
 彼車と推来りし旅客は乃ち晁蓋花榮呂方郭盛等あり彼棒と  
 使ふと漢と賣漢子どもは乃ち是燕順劉唐杜遷宋万あり又擔と挑  
 て来りし漢子共は則ち是朱貴王英鄭天壽石勇等々彼蛇と使ひ  
 漢と賣漢子共は是阮小二阮小五阮小七白勝等々都て梁山泊の豪傑  
 十七人百餘人の小賊と引馳来り斯猛威と振て土兵共と追散し

彼二の斧と持し大漢子の猶四面八方に跑て軍卒等多く砍倒  
 此漢子が功第一晁蓋の手と此漢子と識認すて想ひし彼は何  
 者あは斯比類ある働きたなり武勇と現すとよと良久ししてのち  
 忽ち想ひ着るる嚮に戴宗梁山泊し黒旋風李逵とやらん云豪傑  
 よくしこの手に双の斧とつひ萬夫不當の勇力あり此者宋江と愛  
 敬する事師父のごとと語りし。必定此漢子がとありし晁  
 蓋高聲に呼て云るる前面の豪傑は黒旋風李逵とやらん彼  
 大漢子是と聞き多しと敢て答は只管斧と輪して土兵共と四方に  
 追ちし。晁蓋此時宋江と戴宗とと背し小賊に下知して彼漢子  
 がありしに隨へし直に十方街に至て四方を顧る。土兵軍卒其數を知  
 らず斬殺され尸は横りて野に遍く血の流まき渠とあせり諸の頭

宋江 弱 豪傑 虎 淘 見 考孝 仁 婦人 小兒 曰

領ら都々彼大漢子が後の跟て盡く城外に斬て出るれば江州は  
軍民百姓此勢ひと見て大に怕ま近き進人とする者一人もあつり  
る。彼大漢子遂に江辺に至る許多の百姓等と砍伏しる。晁蓋再應  
おまを制しられども。彼漢子曾て耳も聞入す。まずく斧と輪して  
虎の勇とあしひる。漸五七里むろろふ至る。前面と望み見ると淘  
淘とる大江の有り只一筋の旱路もある。晁蓋此所小路あこと  
見ると大ひふ憂へ。處に彼大漢子忽ち呼つて云る。長兄等と憂  
ろふとあられ先宋押司と戴院長とと廟の内に休息あらしめ  
と叫び當先に進もうろ

○伯龍廟に英雄小く義に聚

卓見 武勇 只提 金 虚 賣 一 過

大漢子斧と以て廟門と打開しる。つづきも廟中に入る。前回の額  
とらる。四の金字あり。乃ち白龍神廟と云文字あり。此時小賊  
等宋江と戴宗とと廟の内に却り休る處に宋江方に眼を開  
て晁蓋等衆人と看て覺は。兩眼に涙と洒で云る。晁天王あまこ夢  
中の衆會ふ。あらしや。晁蓋が云長兄。死ふ山陣に苗りる。さじ  
ゆ急今日の苦く。さうけりひね。寔に危かり。事ありとて各息を  
継ある。晁蓋又宋江に問て云る。彼大漢子の誰あるや。宋江云  
彼へ則ち黒旋風李逵と云ものあり。彼向やも再三我を助け。空中を  
逃出とて諫めし。うとも。我竟に脱き。さきとと察し。彼が諫と用  
ひ。さうら。晁蓋が云彼が働き。諸人に勝る。其功第一。誠は。さ  
一人の豪傑うかと称し。宋江又即ち李逵に對して云る。汝

早く我が義兄に見へんや。李達あまを聞て忙しく晁蓋を拜して  
云々。長兄必も遅拜の罪を赦しえとて。又諸頭領に對面しけ  
る處に。朱貴と李達と本同郷ありし。二人別してあまを悦び  
花栄が云某ら己に此所至り大江に前路と攔られ。あまも一艘の船  
もあらず。江を渡らん方便あり。若官軍大勢後へ慕ふ。追  
來らば。いづれぞよきあまを迎へ敵し戦えんや。李達が云諸長兄少  
くもあまを憂へ。とあり。若軍卒ら再び來らば。我又二の斧  
と振て。一時に斬拂ひ直に城中に跑入り。かの賊官蔡九知府と捉て  
首と刎べ。此時戴宗漸眼を開き李達と對して云。若賢弟必  
と卒尔のこゝにあす。城兵猶五七千もあらん。若勢ひ  
に乗し。再び城内に侵入を必定誤りあるべき。阮小七が云對岸に數

艘の船遙に。某ら兄弟三人。水と越り彼所より。早も舟  
と棄ひ取。諸人と渡すべし。晁蓋が云此計究く上策。人速に  
船と棄ひ取來り。命じられ。阮兄弟頓て衣服と脱て水中に  
跳入。約莫半里程至り。五艘棄ひ來り。又皆上流と。三艘は  
快船飛ぐ。漕來る舟の上。各十餘人の漢子とも打乗し  
毎手軍器と持て。や近々と漕寄し。諸人あまを大いに  
驚き。宋江の獨り自ら歎息して云我ら命必も此所。終るべし  
とて。廟の前に走り出。彼舟と望み見らば。先に進。一艘の舟乃  
上に一人の豪傑。手に鎗と撚つ。己に岸邊に漕至。宋江此漢子。可  
とよ。浪裡白跳張順あり。張順乃ち船の頭に躍出  
て大音聲に呼。汝等何者。あまを白龍廟の内に在

て衆と聚るや、宋江急に呼つて云、賢弟宜しく宋江と救えんや。張順等も是と聞て、大ひに悦び、三艘の快舟齊しく岸に揺着るれ。宋江喜悦斜あらず、あまことろろに一艘の舟より、張順自ら十餘人の漢子、引く岸に上る。又一艘の舟より、張横もつらつら、穆弘、穆春、薛永等と共に十餘人の漢子と引て岸に上る。また一艘の舟より、李俊自ら、李立、童威、童猛等と共に十餘人の漢子と引て岸に上る。張順、先天下悦び、地の喜んで、宋江を拜して云く、長兄入宰し、まひて以來、某坐立安んせぬ。何ぞ長兄と救えんと図りしうも、又良計あり、守益憂める處、戴院長同く擒とかりつらひ。李長兄、又曾て遇ひ、某一人が力の及ぶ所あり、さうし、由急に馳て、兄張横、斯と告、即ち穆弘が家に於る。人數と聚今日直に江州城に攻入、長兄戴院長と救えんと図り、さるの、豈知らんや。

とや人あつて、長兄と救ひ出、想を守此處より、恙あそ射と見せしめ、さうして、莫太の幸ひあり、叔此幾むくの豪傑へ、梁山泊の晁天王や、あらずや、いん、宋江答く、彼座上に居る、梁山泊の晁天王、其外總く、山陣の頭領あり、各相見し、まゝして、張順ら九人、晁蓋等十七人、宋江、戴宗、李逵、三人都く、二十九人、衆皆白龍廟へ入て、奉會も、是と名づけ、白龍廟小聚會といふあり。此時諸の頭領、礼とあつて、相見し、坐己に定り、さる處に從へ來り、小賊ら、忙とて、廟中に、報く、江州城より、若干の軍馬、金鼓と鳴り、開と作て、馳出、旌旗、日と蔽ひ、劍戟、麻の、どく、に、さや、近々と寄來り、李逵、是と聞て、大み怒り、二の斧と、双の手に持て、當先に進、さる、晁蓋、諸人、さ下知し、李逵と助け、一戦とあせと呼、さる、處に、諸人、一度に、軍器と揮

新編水滸畫傳卷之七

馳出々々。官軍すべく五七十喊を叫んで斬てかると。李逵怒々大勢に打向ふ。其背後より花榮、黃信、呂方、郭盛の四將ひと々々猛威とらて。馳着る花榮敵軍とらるに悉く長柄の鎗と持李逵一人と目づり進々々々花榮急に弓箭打搭へ満月のてく拽撓々々漂と放てむ。當先にす々々敵の勇士と馬より下に射落々々官軍も是と見々大驚き各先と争ひ逃散んとせ々處に梁山泊の豪傑ら四方より夾々撃々々官軍多く討を潰乱を鋒と倒々々盡く逃走と。梁山泊の豪傑ら益勢ひに乗じて追撃々直に江州の城下に至々々處城中より矢石雨のてく飛せ急に城門を開き々々敗軍らら。這々城中に逃入々々あつに於て花榮ら再び李逵と引て白竜廟ふ馳回りぬ。

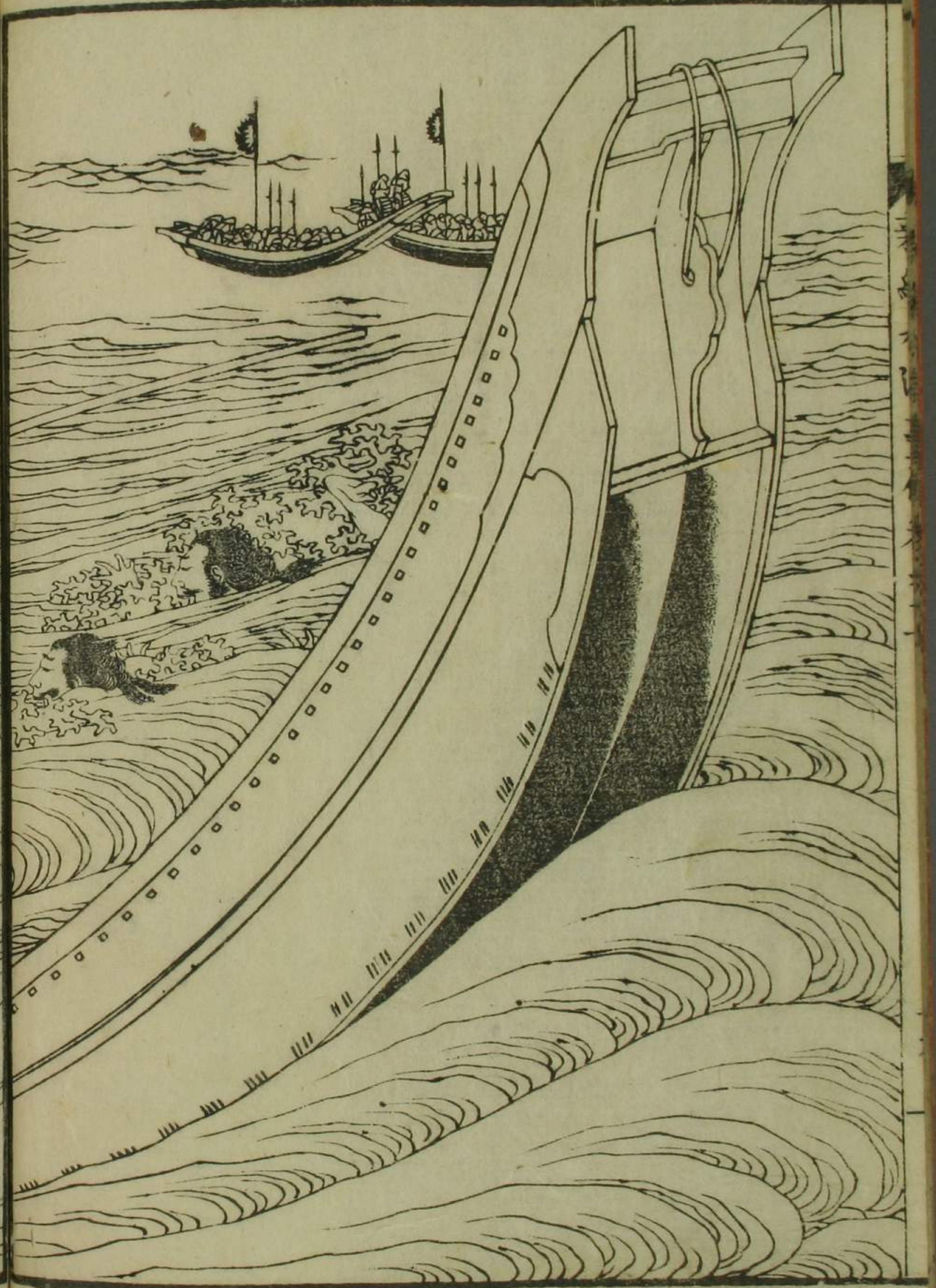
○宋江智とめつ々無為軍と取

晁蓋諸人ふ下知し。衆皆船に乗ら々々。則ち順風に帆と揚直に穆弘が館と望ん々走り々々。暫時の間、岸ふ着。諸豪傑各岸に登て。遂に穆弘が家に立上り、一處ふ穆太公自ら出々相迎へ頓て酒宴と設け々。諸豪傑と饗應々々。此時晁蓋が云。張順ら若舟と以て迎へすんべ。我が輩殆ど危うくべ。宋江が云。某と戴院長とハ何の幸ひふや。長兄らの為ふ萬歳の舟に於々一生と得ぬ。若然らぎんべ。非命の死と何ぞ避得ん。今日の恩ハ滄海より深し。つらんぞよく。是を報ふべき猶只恨ら々々。彼黃文炳我とハ原より冤も仇もあらに再三我と害せんと計々々。と憤憾骨髓に徹々ぬ。我若此仇と報せせんべ。あによく寸志と安んぜんや願々々。諸豪傑我為に無為軍と攻

三阮兄  
弟  
江中集  
船

所編水鏡書傳卷之二十七

七



て黄文炳と活捉我が此恨と雪ぐらるる人晁蓋が云我輩斯て在上  
彼と活捉んと掌と反ひよりも易し然まとも彼賊もや必定此騷  
動と聞て嚴く備と設く人志う先山陣に回て軍師呉学究并  
に公孫勝林冲秦明等ととのに商議し再び大軍と引て彼賊と活捉  
人此度先急に梁山泊に歸りて先耳し休息と遂々宋江が云若  
直に山陣に回りあは重ねて来らんと難うべし其由ある第一山遙に  
路遠し第二江州ふ公文を開き行ひ多く人馬を備へ防ぎと堅固小す  
べし然らば却て彼賊と捉へんと易うらし只能此便機に乗じて下  
下さば立處に彼と捉へし花榮が云宋長兄の言を可あり若無為軍  
の路徑と識人ありば先よきと城中に遣し彼が住所とも見届しめ  
其後馳向く手と下さば何の苦もあく活捉べし只恨らるる彼地め

案内と知人あるまじ薛永聞もあらず進み出て云らるる某天下と統  
て所々の路徑とよく知る内も無為軍就中某が熟路ありて其案内と詳  
み知りぬ望らるる某馳て動静と伺ふべきや宋江大に悦で云賢弟肯て  
行かば我心安んずべし薛永其日衆人に別をて独自ら無為軍と望  
んが馳行かん宋江の穆弘が家に逼留して己に諸豪傑と商議して  
無為軍と攻る用意と催しうる叔薛永の遂に無為軍に至て第五日  
の午乃上剌に再び穆弘が家に回り即ち一個の人と誘引して晁  
蓋宋江に見へし宋江先問く云此豪傑の誰あるぞや薛永答て云  
這人姓へ候名へ健と号して本洪都の人あり當世第一裁縫の上手  
みくむ能針と飛せ線と走らしむ況や鎗棒とも能使ふ乃ち某が  
門弟あり彼原來身躰瘦く依り人皆通臂猿候健と呼り

則ち無為軍の黄文炳が家に矢をく衣服と縫て在して誘引して  
 此所に至りて宋江大に悦び即ち江州の消息并無為軍の路徑と  
 問々まで薛永答ていそく今蔡九知府我輩に討まてらる官軍と  
 記さるるに五百有餘人ありて疵と被りし軍卒へ其數とあつ  
 ずとあり是に因りてや使者と都に馳て此ことを朝廷に奏問し  
 城門へ日中後に閉し出入と緊しし査め用心尋常に異あり長  
 兄と害せんと計りしとらぬと蔡九知府あまきと欲せざりし  
 ども彼黄文炳再三頻りに知府と諫めり斯のときに至らしめぬ  
 今江州城の軍民らへ梁山泊の豪傑再び來り江州と犯すを責めや  
 あらんし各怕まざる一人もあらず某又無為軍に至り則ち黄文  
 炳が家の前に徘徊して動静と問窺つて居る所此侯健想と云

黄文炳が家より出し由急則ち此度の事と告て黄文炳が消息と詳  
 びるに問ひいあり宋江大よろこび則ち又侯健に對して黄文炳と  
 と問ふは侯健答ていそく彼に同胞の兄黄文輝と云者あり此人へ  
 常に善事と好まありは橋と修理し路と造り補ひありは貧を  
 扶持し困ると救濟専らよろ仁慈と行ふとめり人皆彼と稱して  
 黄老佛と綽名せり又彼弟黄文炳へ唯人と害すること好まおのこ  
 に勝る者と妬み己に劣る者と傷ひ専ら悪事と行ふおの故に  
 人皆彼と稱して黄蜂刺と綽名せり前日黄文炳知府と諫て押司と  
 害せんと図りぬること兄黄文輝是と聞て大いに憂ひ必報ひある  
 べしと悲まらる黄文炳果して自ら禍と招ぬ此兩日江州の貴賤都  
 て押司の責め沙汰して衆皆怕まらる由急黄文炳あまきと聞ていよ

新編 太平御記 卷之九



よよ心中の龔を慄き、昨夜江州に趣き、蔡九知府を訪ひ、何事  
 のことと議す。ふや未だ家に回らざるとあり、宋江此時諸頭領に向ひ  
 云々、黄文炳が動静己に閑知りぬ。よめ、各位我が為に彼を殺し  
 て仇と報じ給ふべきや。諸豪傑一同に答て云々、某ら死と捨て馳  
 向ひ終に黄文炳と殺して、長兄の仇と報じ、冤と雪ぐべし。宗江又云無  
 為軍の百姓ら、我ふ仇とあり、一者あま必む一人も害すべからば  
 又黄文炳が兄黄文輝、専ら仁徳と行ふ人あま必むこれと傷ま  
 らば、若あまを傷まるとあり、天下の人皆我輩が不仁をうること罵るべ  
 し。若無為軍に至り、黄文炳が家内、外一個の人とも害  
 傷ふとあり、今彼所に馳行んぬ。我々の計あり、諸頭領我が為に  
 よの事と行ひ、豪傑等答て云、長兄すでに計あり、速におまこと示し

又、宋江が云、五十東の葦と五艘の大舟に積て、張横、三阮、童威らと  
 乗し、又二艘の小舟に、李俊、張順らと乗し、計かくのどく  
 行ち、可あらん。諸豪傑あまを閑し、然りと同く、宋江又  
 侯健、薛永、白勝らに計と授け、魚為軍の城中に遣して、三更の時  
 に計と行し、又石勇、杜遷と城門の左に伏置て、火の起と相圖と定  
 め、計と行し、夜己に全く調り、諸の豪傑頓て粧束と改  
 め、各身、軍器と帯し、先晁蓋、宋江、花榮ら、童威が船に乘、張順  
 王英、鄭天壽ら、張横が船に乘、劉唐、黃信ら、阮小二が船に乘、呂方、郭  
 盛、李立等、阮小五が舟に乘、穆春、穆弘、李逵ら、阮小七が舟に乘、李俊  
 張順、兩人、只江面に往來して、救應とあり、朱貴、宋万、穆太公  
 が館に留め、江州の消息と閑し、分換己に定り、其夜五艘

の舟一齊に搖出運に無為軍と望んで進んで来る。此時七月の末ふ  
て夜涼しく風静に月白く江清く水の影山の光上下一々の碧残  
見る已あつて初更の前後の大小の船多く無為軍の江中に入り岸辺  
に至る。芦葦深き所と擇んで舟と一行に縦ぎて處に童猛の哨のと  
め独り快舟と漕で先城下に至りて。此時忙しく船と回し再び  
岸辺に來り則ち報して云く。城内の人音静や。何の用意もあ  
り。宜しく速に計を行ひて。宋江あまを関く大ひ悦び。則ち諸人ふ  
下知して船の上の積し芝葦と都く岸上に運ぶ。ゆるる時一更の末  
側あり。宋江又張横三阮兩童らと船に留め。賢弟ら六人。宜しく船と  
守り城中に火の手上ると看あべ。早速岸に登て我輩を迎へ。約と  
定め。ゆる其餘の頭領各手中に軍器と拿。城辺に至り。城と望み見

の白勝己に此所在。諸人ふ對して云く。對面に露をくゆる大  
家へ。則ち黄文炳が居宅あり。宋江問て云。薛永侯健へ何もの所有  
や。白勝が云。彼兩人へ黄文炳が宅へ忍び入んとて。名を行く。口長兄  
の至りまを待て。計を行くと欲も。宋江又問て云。汝へ石勇杜遷ふ  
へ遇ざり。や。白勝が云。彼兩人へ城門の邊不在。相候ふ。宋江是を聞  
て。則ち諸の豪傑と共に城中に忍び入直に黄文炳が家の前に至りし  
處に。侯健己に簷の下に在。ゆる宋江近く呼で低言を。汝急に菜  
園の門を開て。軍士と介め。宜しく芝葦等と其内に積上。せ。薛永  
に火を求。ゆる芝葦に移。則ち黄文炳が門を敲て。隣家に出火あり  
と呼。ゆるゆる。彼若駭て門を開。ゆる我自ら計と行。ゆる。豪傑  
らと分遣。ゆる左右と守ら。ゆるれば。侯健は。名去て。菜園の門を開

き軍士らを入りぬり、其内に高く積上則ち薛永に火を放せ、  
 せこへ黄文炳が門と敲て大音聲に呼らるる隣家に火をせり、早  
 く門を開て家財等と運び撤さるる、云も終らざるに家内の男女  
 とも火の光とて大ひに駭き慌て立出門を開き、乃に晁蓋宋江  
 ら喊き叫んぬ、家内に斬て入り、諸の豪傑ども相續て斬て入り、  
 一人とてれ、一人と殺し、二人に遇へば二人と殺し、黄文炳も眷属すて四五  
 十、暫時の間ふ斬盡し、然るも独黄文炳の見へざらる、諸の豪傑  
 ども家内と捜し、金銀珠玉、くまきと取り、一科は喊の声を揚城上、  
 望んぬ、馳來ぬ、扱石勇杜、二人へ火の起りくるを見て、各刀を揮き、城門  
 と守る軍士と斬殺し、まじく前後を顧み、猶人も有らば伺はる、乃に  
 當地の百姓ら、毎手に水桶梯子等と持て火を救ふんと、跑來騒動大方な  
 らざらん、黄文炳が倣行へ次巻と見て知べし

按に此巻ふ蕭讓金大堅と誑く詞に岳廟と云へり、ふへの聖王天  
 下の鎮守、くろくき山々、齊の国の泰山と云へり、東岳西岳南岳北岳  
 中岳の五と定め、天子自ら其地に臨で旅とあり、此五岳の道隔り  
 くるも、後世ふ五岳の灵と一所に封じ入、勸請して、諸州諸縣  
 ふ有て岳廟と称し、則是山の神、又白龍神の廟へ大江大川の水、  
 水神の廟と勸請せし、又論者の云、戴宗と紅問する、蔡九知府が  
 詞に父大師が家の門者と問く、王公と云者死し、其子と又門者と  
 たり、未だ年若あるに、つらんと云、其趣小身者の屋鋪  
 う寺院の把門の躰に思ふ、蔡大師の宋の宰相あり、日本に比せ  
 ば、何れも百餘万石の分限をうべし、通鑑の類に出る、吸其外大臣の

身上の趣中々輕少の工にあらば然るに水滸傳ハ支那人の作有  
 あぐらゆるも不相當の工に在や宰相の把門あぐら大勢代るぐ勤  
 べき工と又黄丈柄と亡さんとも宋江が軍配に無為軍の度民罪か  
 くれべ一人も傷ふまじきと真の豪傑の指揮と云べし然るに霹  
 靂火秦明と清風山の苗んとて餘多の罪かと良民と屠る秦明  
 ぐ眷属と殺さるゝのりある不仁の計ひぞや

新編水滸畫傳卷之三十七 畢

凌烟山



子  
家

大坂東  
安政  
所見  
同  
利  
五  
有  
有  
有